
とある最低とフレームヘイズ

通行人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最低とフレームヘイズ

【Nコード】

N7514X

【作者名】

通行人 A

【あらすじ】

球磨川さんが、灼眼のシャナの世界に行って、色々やらかすというものです。

球磨川楔の消失（前書き）

駄文ですがよろしく願いします！

後、球磨川さんの能力は作者の解釈で行いますのでご了承ください。

それでは本文をどうぞ！

球磨川楔の消失

『うーん。困ったなあ』

『どうしてこんなRPGの世界みたいなところにいるんだろうっ？』

彼は困ったように言う。

見た目は何の個性もなさそうな普通の少年。
そして、世界最低の過負荷^{マイナス}を所持する者。

少年の名を、球磨川楔と言う。

彼の存在は、この世界において何をもたらすのだろうか。

フレームヘイズと過負荷^{マイナス}が交差するとき、物語は始まる。

とある学校の教室にて

『あゝあ。退屈だなあ。学校つぶしも飽きちゃった』

一人そう呟く少年の手には大きな螺子が握られている。彼の周囲の人間達は、皆螺子をねじ込まれていた。

『何か面白い事が起こらないかなあ？』

『何か起きるとしたら、少年漫画チックなことがいいな！』

『そうだね。例えば別の世界に行って悪と戦う！こんなのどうかな？』

そんな彼の問いかけに返答するものは誰一人としていない。

『うゝん。……そうだ！』

『窓の外を見て消したくなったものを適当に消しちゃうってのはどうかな？』

普通に考えたらそんなことはできないと思うだろう。だが、彼…球磨川楔はそれができる。

彼の過負荷「大嘘憑き」を使えば。この過負荷はあらゆる事象を虚構にできる。その力は何も生み出さない。できる事は消す事だけ。だから何の役にも立たない負。^{マイナス}

『でも、僕の暇潰し程度にはなるよねっ！』

無邪気に笑いながら窓から外の景色を眺める球磨川。

さあ、何を消そうか。

できれば人がたくさん迷惑を被る所が良いなあ。等と無邪気な顔で邪気満載なことを考えながら

『……………何だこれ？』

自身の足元にある黒い穴に気づいた。

球磨川は驚きを隠せない。こんな現象は初めてみるからだ。

黒い穴は瞬く間に広がると、彼を飲み込んだ。

あまりにもあっけなく。

少年はそこから消えた。

「『僕は悪くない』」(前書き)

球磨川さんのキャラは最高ですよね!!

本文をどうぞ!

「『僕は悪くない』」

「『うゝん。ここは……………？』」

気がつくど、どこかの森の中に一人ポツンと立っていた。

「『一体此処はどこなんだろう？』」

球磨川は辺りを見渡しながら森の中を歩き始める。

すると……

ガサガサ…

「『ん？』」

突然近くの草むらがざわめき始めた。

球磨川がそちらへ視線を向けると、昔の騎士のような鎧をきた変な怪物？のようなものが数十人程度出てきた。

「あん？なんだコイツは？人間か。ハハッ、ちょうどいい。食事させてもらうとするか！」

そいつらのリーダーらしき男？はそう言つと、剣を取り出した。

「『おいおい…』『早速トラブルかい？』『人気者はつらいぜ』」

球磨川がそう言うと同時に、目の前の男が剣を振り下ろしてきた。

「『おつと』」

球磨川はそれを軽々とかわすと男達に視線を向けた。

「『まったく。いきなり攻撃してくるなんて、何て悪いんだ君たちは』」

そう言うと、球磨川はどこからか巨大な螺子を取り出す。

「『そんな悪い君達は、僕が螺子ふせてあげるよ』」

同時刻。

森の中を高速で駆け抜けている二人の女性の姿があった。

一人は燃えるような紅い髪をした女性。紅世真正の魔神、天壤の劫

火アラストールのフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』マティルダ・サントメール。

もう一人は貴婦人が着るようなドレスを着た女性、夢弦の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ『万丈の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメル。

二人は先ほど紅世の徒が出現した気配を感じてその現場へと向っている最中なのだ。

「徒の気配はこっちよね？」

マティルダは隣にいるヴィルヘルミナに向って問いかける。

「はい。でも、徒の反応がどんどん消えているのであります」

「摩訶不思議」

マティルダの問いにヴィルヘルミナは確認しながら答える。

「それに、人の気配もする。同業者つてわけでもなさそうだけど…」

「とりあえず行ってみれば分かるのであります。」

「現場急行」

二人は消えていく徒の気配を気にしながらその場へと向った。

「なに……これ」

「これは…一体」

それからしばらくして二人は現場へとたどり着いた。

だが、そこにあったのは

巨大な螺子に貫かれた地面や木だった。

そしてあらゆる場所に徒たちの火の粉が漂っている。

大量にいた徒たちは皆、何者かによって討滅されていた。

「一体誰が…」

「『いやーこれは酷いよね』」

「「ッ!？」」

突然響いてきた声に二人は身構え、視線をそちらに向けた。そこには、黒い服をきた少年が立っていた。

「訳の分からない怪物たちが相手だとは言え螺子で滅多ざしとは惨い人もいるんだね」『一体誰が面白半分でこんな状況を作り出したのかは分からないけど』『おっと、勘違いしないでくれ』『僕が来たときにはこうなってたんだ』『だから……』

少年はそこで言葉を一旦区切り……

「『僕は悪くない』」

片手に螺子を持った少年、球磨川楔は二人に向ってそう言い放った。

「「ッ！！？」」

そんな球磨川を目の当たりにしたマティルダとヴィルヘルミナの胸にはある感情が芽生えた。

それは、『嫌悪感』。

球磨川の姿を見た瞬間、彼が敵であろうとも、味方であろうとも、彼が何者であろうとも……どんな形であれ、『関わりたくない』

と思つてしまつた。

だが、そういうわけにも行かないので、そんな感情を押し殺して球磨川に話しかけた。

「えっと…君は？」

「『僕？』 『僕の名前は球磨川楔だよ』」

「ここで何をしていたのでありますか？」

「『うんうん、そうそうそれぞれ！』 『聞いてよお姉さん』 『僕今とっても困つてるんだ』 『実は僕気がついたらこの森の中にいてさ』 『此処がどこか分からないまま歩いてたんだけど』 『よかつたら此処がどこか教えてくれない？』」

球磨川の言葉に嫌悪感を感じながらもヴィルヘルミナは平常心を保ちながら答えた。

「此処はオストローデ付近の森ですが…」

「『オストローデ？』 『へえゝ聞いた事ないな』」

「オストローデを知らない？まあ無理もないか。今はもうないしね……」

「『ま、別にどこだろうとかまわないけどね』『ところでせっかく僕が名乗ったんだから君達の名前も聞かせてよ』」

「あ、うんそうね。私は天壤の劫火アラストールのフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』マティルダ・サントメール。」

「私は、紅世の王、夢弦の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ『万丈の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメルであります」

球磨川に催促され、討ち手としての称号と名前を名乗るマティルダとヴィルヘルミナ。すると球磨川は首を傾げる。

「『フレイムヘイズ？』『紅世の王？』『何それ？』」

「知らないの？てつきり知ってるかと思っただけ」

「まあそれについては後で説明すればいいのであります。とりあえず、貴方には聞きたい事がいくつかありますので私達と同行してもらうのであります」

「『えゝそれはちよつとイヤだなあ』『と言いたい所だけど』『君たちみたいな綺麗な人に連れて行かれるなら別に良いかな？』」

そういつて球磨川は同行を受け入れたのであった。

「『甘えよ』『(前書き)』

球磨川さんって結構名言多いですねー！

では本文をどうぞ！

「『甘えよ』」

森の中でマティルダ・サントメールとヴィルヘルミナ・カルメルに出会った球磨川は様々な事を聞かされていた。

人の存在を喰らう歩いていけない隣の世界からきた住人、紅世の徒。存在の力の乱獲によって引き起こされるであろうといわれている大災厄。

それを阻止し、世界のバランスを保つ為に作られた紅世の王が入った存在、フレイムヘイズ。

存在の力を使って使用する自在法。

『都喰らい』という自在法を使い、空前のゆがみをもたらした紅世の王・棺の織り手アシズ。

その彼が率いる徒の集団・『とむらいの鐘』

それに対抗するために組織されたフレイムヘイズ兵団。

彼女達は気がつかなかったが、その説明を聞いた後の球磨川の顔は、とてつもないほどに歪んだ笑みに満ち溢れていた。

そんなこんなで、なにやらテントのようなものが集まった場所に連れてこられた球磨川。

「『へへえ。すごいや！』『まるでRPGの世界だね！』」

と、球磨川はやや興奮気味に歩いている。

そんな球磨川をマティルダは「静かにして」と注意すると、あるテントの中に足を踏み入れた。

その部屋の中には修道服を身に纏った女性が椅子に座っていた。

「あら。もう帰ってきたんですね。で、そこにいるのが貴方が報告のあった人なんですか？」

そう言うと、女性は球磨川へと視線を向けた。

「うん。球磨川くん、自己紹介してくれるかしら？」

「『はい』」

そう言つて球磨川は一步前出る。

「『どーも初めまして』『この度こちらに保護された球磨川楔です！』『好きなものは少年漫画です』『よろしくお願いします！』」

「あ、はい。初めまして。私はゾフィー・サバリツシュ。一応フレームヘイズ兵団の総大将をしております（少年漫画……？）」

「『へーあなたがこの大将さんなんだ！』」

「それよりも、なぜ貴方の様な普通の人間がこのような場所に？」

「『それが分からないんですよー』『黒い穴？みたいなものに吸い込まれて』『気がついたら此処にいたんですよ』『』」

「それは一体どういふことですか？」

「『話を進める前にゾフィーさん』『催促をするように申し訳ありませんが』『お茶をください』『今すぐに』『』」

ゾフィーが球磨川の言葉の意味を確かめようとするが、次に球磨川が放った言葉でそれは遮られた。

「『何分彼女達に会ってここに来るまでに』『随分と森の中を歩き回ったんで』『のど』『渴いてしまってます』」

「…そうですね。ごめんなさいね気が利かないで。ドウニ、紅茶をお願い」

「は、はあ」

傍らにいたゾフィーの副官ドウニは気の抜けた返事をして、紅茶を入れに行った。

その間、ゾフィーは自分の目の前にいる球磨川をジッと見ていた。

「（球磨川くん……不思議な人ですね。おちゃらけているように見えて、その実……まったく私達に話の主導権を握らせようとしない。それに、数十もの徒を討滅したのがこの少年なのだとしたら、この少年は相当な戦力になるかもしれませんね……。それに、あの子からは徒でも、フレイムヘイズでもないまったく別の何かを感じる……）」

ゾフィーが球磨川を見ながらそう考えている間に、ドウニは紅茶を淹れ終え、球磨川に渡っていた。

「『んっ』『おいしっ』『』」

「さて、喉も潤ったところで、球磨川くん」

球磨川がお茶を飲んだのを見計らって話を再開させた。

「さっき言ってた、黒い穴に吸い込まれてきたと言っのはどういうことなんですか？」

「『んー？』そのままの意味ですよ』『何度も言っとおり』『黒い穴に飲まれて、気がついたら森の中にいたんです』」

「……………まあいいでしょう」

その辺は深く追求せず、ゾフィーは本題を切り出した。

「球磨川くん。私達に協力してくれませんか？」

「『？』…と言っの？』」

「この世の本当のことは、マティルダから聞きましたよね？徒たちと戦っのに力を貸して欲しいんですよ。勿論、無理にとは言いません。ですが、一人でこの辺をうろつくと、徒に出会っってしまうかもしれません。もし王クラスの徒と鉢合わせてしまったら最悪…殺さ

れる事もありえます。私はそんな事になってほしくありません。そこで、球磨川君には兵団に所属して欲しいんです。貴方へのメリットとしては兵団に所属する事で、衣・食・住の保障はできるんだけれど……どうします？」

「『……………』」

ゾフィーの説明を聞いた球磨川は『ふう…』とため息をつき口を開いた。

「『やれやれ』『つまり貴方は遠まわしに』『協力しないと徒に会ったらどうなっても知らないぞって』『脅してるんだね』『人のよさそうな顔をして』『とんだ策士だよ』」

「そこまで分かるなんて球磨川君は賢いんですね。それなら、どうすべきか分かるはずですが…」

「『…そうだね』『今置かれている状況からしたら』『僕に残されている選択肢は一つしかない』」

「それならー」

ゾフィーがうれしそうに口を開きかけたその時……

ド
ド
ド
ッ！…

「……………え？」

一瞬、ゾフィーは何が起こったのか理解できなかった。

だが、すぐに理解した。

自分の両腕、両肩、わき腹に巨大な螺子が突き刺さっていることに……。

「ゾフィー！！」

「総大将!？」

突然の事態に呆然としていたマティルダとドウニが叫ぶ。そんな中、彼女に螺子を突き刺した張本人：球磨川楔は笑っていた。

「『僕に残された選択肢』 それは今ここで貴方を葬る事だよ』
『ゾフィーさん』」

「くっ……ごほっ……!!」

驚愕と苦痛に満ちた表情で血を吐くゾフィー。

「『あれれ?』 何その顔?』 『女の人なら攻撃されないと思った?』 『このボスを気取ってれば安全だと思った?』 『僕が可愛らしい顔立ちだから』 『おしゃべりの最中なら死なないと思った?』」

そっぴいながら球磨川は一本の螺子を彼女の眉間へとあて……

「『甘えよ』」

その螺子を渾身の蹴りで
頭にねじ込んだ。

……はずだった。

「はっ!？」

「『…が』『その甘さ』『嫌いじゃないぜ』」

そう言って、ビシッと指を突き出す球磨川。が、当のゾフィーはそれどころではなかった。

「（何ですか今は…。幻覚でも錯覚でもない。痛みも感触も本物だった。でも、体に刺さっていた螺子も、傷も、服も、血の跡さえ残っていない！？）」

ふと、マティルダたちに視線を移すが、皆困惑したような表情を見せていた。

「『まあでも』『せっかく来たんだ』『君たちに協力するのも面白いかもしれないね』」

一方、球磨川は何事もなかったように会話を進めている。

「『さてと』『ここで話してるのも飽きたし』『外の空気でも吸いに行こうかな？』」

そう言っ球磨川はテントから出ようとする。

「待ちなさい！まだ話は…」「マティルダ！」「……！」

テントから出ようとする球磨川を止めようとするマティルダだが、ゾフィーの一喝で止められる。

「構いません。ですが妙な真似はしないように」

「『さつすが総大将』 話の分かる人だ』 『そんな総大将』 『僕』
結構好きですよ』」

そついい残して球磨川は出て行つた。

出て行くのを見送つたマティルダはゾフィーに問いかけた。

「どうして？あの子には聞きたいことが「私は」……！」

彼女の言葉を遮つてゾフィーが口を開く。

「フレイムヘイズとなつた後でも、いろんなところを駆け回つていろんな人を見てきました」

「でも、球磨川くんのような人は見た事がありません。今まであつた人の中には、今のままで満足している人、さらに上を目指そうとしている人がほとんどでした。でもあの少年は違う。上ではなくて、下を目指している人間………！」

そこで彼女は口を一旦閉じ、再び開く。

「もしかしたら……私はとんでもない人を引き入れたかもしれませ
んね」

その言葉に返せるものは誰一人としていなかった。

つづく。

「『甘えよ』」（後書き）

話の展開に無理がありますかね…？

「『また明日とか!』」(前書き)

やりすぎたかな？

本文をどうぞ!!

「『また明日とか!』」

テントから出た球磨川は、特にやる事もないのでその辺をぶらぶら歩いていた。

「おい。お前が球磨川楔か？」

背後から声をかけられ、球磨川は振り向いた。
そこには、体格のいい甲冑を着た青年が立っていた。

「『? 僕なんか何の用かな?』」

「俺はカール・ベルワルドってんだ。ちょっと付き合ってくれよ。
ゾフィーの大將が認めたお前の実力を見てみたいんだ。いいだろ?」

突然の鬨いの申し込み。

球磨川はいつもどおりのあざとくも人のよさそうな笑顔で

「『うん』『いいよ』」

と答えた。

結論から言おう。

カールは球磨川を圧倒していた。当然といえば当然である。数多のフレイムヘイズの中でも1、2を争う強さを持っているのだから。

「おいおい。そんな螺子を振り回しても俺には勝てんぞ?」

球磨川は螺子を振り回す。

カールが、ゾリヤーで彼の体を引き裂く。

球磨川は螺子を投げつける。

しかし、カールはそれを避けると、カウンターの一撃を入れる。

攻撃としては回避され、一撃を叩き込まれる。

腕に、肩に、足に、膝に。

それでもカールはまだ手加減していた。何せ、唯の人間である。致命傷を負わない程度にはしていた。

「『……………』」

それでも球磨川は懸命に螺子を振り回す。

その表情からカールはある種の不気味さを感じ取っていた。

体を切られ、打ち付けられても、それでも彼は――――

彼は笑っていた。

「『まったく』『こんなに僕をボコボコにするなんて』『週間少年ジャンプじゃ規制されかねない描写だよ』」

球磨川はそう言うと、よろよと立ち上がる。

「『さてと』『そろそろ僕も』『少しでも本気出そうかな?』」

球磨川がそういったとき、カールは何か違和感を感じた。まるで、空間が捻じ曲がるような感覚。

「（まずい！何かくる！）」

そう考えて彼は球磨川と距離をとる。

しかし……。

「なっ――！」

確かに、ゾリヤーを使い、距離をとった。それなのに……。

何でコイツが目の中にいるんだ？

しかも、あれだけあった傷が、全て治っている。

「くそっ！治癒と転移の自在法かッ!？」

驚くカールをよそに、球磨川は

「『そんなに驚かなくてもいいよ』『君が僕と距離をとったという現実を』『無かった事にしただけなんだから』」

「『それに』『治癒だなんていう【利点のある能力】が』『この僕にあるわけじゃないか』」

冗談はやめてくれといわんばかりに首を振る球磨川。

カールは目の前で起きている不可解な現象に思わず目眩を催した。

「お、お前は…」

消え入るような声で、すぎるような声で。

「一体、何なんだ!？」

懇願するように、問うた。

「『知っているだろう?』 『僕は球磨川楔。ただの過負荷の人間だよ』」

そう言つて、どこまでもマイナスな螺子を、彼の体にねじ込んだ。

否、ねじ込もうとした。

「何をしているんですか!」

声が聞こえ、見るとそこにはゾフィー達がいた。

「『何つて』 『僕はカールさんと遊んでいただけですよ?』」

球磨川は悪びれもせずそう言い放つ。

「騒ぎは起こさないって約束だったでしょう、球磨川君!」

「『そうでしたっけ?』 『いやー僕最近忘れっぽいんだ』 『それに勘違いしないでほしいな』 『今回の原因はカールさんなんだから』 『まあでも』 『約束を破っちゃったのは事実だし?』 『じゃあこれ

でおあいこってことで』」

そう言うと、球磨川は手に持っていた螺子を自分の頭に突き刺した。

ブシュッと言う音がして真っ赤な鮮血が滴り落ちる。

皆、愕然として球磨川を見るが

「『それじゃあ』『また明日とか。』」

それだけ言うと球磨川はどこかへと去っていった。

〈マテイルダSIDE〉

気持ち悪い。

それがあの少年……球磨川楔を見たときの感想だった。まるで人間の負という負の感情を固めてできたような存在。

「ねえ、アラストール」

『なんだマテイルダ』

「あの球磨川って子、どう思う？」

『……正直我にもあの者の考えている事が良く分からん。だがこれだけは言える。あの者は危険だ。』

「そうね……でも今は【とむらいの鐘】との戦いに集中しないと……」

もうすぐ大戦が終結する。

彼の元へ向わないと……。

今度の戦いできつと終わる。そんな気がする。

彼女にも、随分つらい思いをさせちゃったしね……。

すべてを消し去る事で、何かを変えられるかもしれない。

～マテイルダSIDE終了～

その頃、球磨川はまたも別のフレイムヘイズと会話をしていた。

「『ねえねえ』『どうして君は体中傷だらけなんだい?』『確かフレイムヘイズは傷跡とかは残らないって』『マティルダさんたちに聞いたんだけど』」

問いかけられた少年……儀装の狩り手カムシン・ネブハーウは表情をあまり変えずに

「ああ、あなたがあの球磨川君ですか。この傷のことなら気になさらないでください。これは……人との思い出のようなものですから」と答えた。

最後の方にだけ僅かに感情の入り混じった感があった。無論、それを球磨川が聞き漏らすはずもない。

「『ふ〜ん』『人との思い出かあ』『でもごめんね』『その傷』『もう戻しちゃった』」

「ッ!?!?」

球磨川がそういった途端、カムシンは何か違和感を感じた。
そう、体にあった傷が全てなくなっているのである。

「『ごめーん』『思い入れとか』『心がけとか』『誓いとか』『僕、
そういうのよく分らないんだー』」

満面の笑みを浮かべながら楽しそうに言う球磨川。

「『んじゃ』『また明日とか!』『』」

そう言って球磨川は何処へと去っていった。

つづく？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514x/>

とある最低とフレームヘイズ

2011年11月8日02時00分発行